様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：１５４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ１３５８６

研究課題名（和文）現代インドの「生物文化多様性」と科学／在来知の接触をめぐる人類学的研究

研究課題名（英文）Cultural Anthropological Study of "Biocultural Diversity" as the Contact Zone of Scientifi and Indigenous Knowledge in Contemporary India

研究代表者
中空　萌（Nakazora, Moe）

広島大学・人間社会科学研究科（国）・講師

研究者番号：６０７９０７０６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、インドにおける「生物文化多様性」に関するプロジェクトを対象とし、特定の科学と在来知の折衝の場で何が起こるのかを批判的に明らかにすることを目的とした。その際に、「科学知／在来知」を「体系」ではなく、特定の場で生成する不安定な「実践」と捉えることで、複数の知識の折衝の場で何が生み出されるのかを明らかにしようとした。調査の過程でインドの「生物文化多様性」をめぐる取り組みは、近年のガンジス川に法人格を認める訴訟と密接に関連していることが明らかになったため、このプロジェクトについても民族誌的調査を行った。そしてその成果を単著『知的所有権の人類学』や複数の英語論文、分担執筆の章などにまとめた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、科学知と在来知を知識「体系」ではなく「実践」と見なし、両者が接触する場で翻訳を通していかなる新しい知識が生み出されるのかを捉えようとする点に特徴がある。それにより「体系」としての科学知／在来知が融合可能かをめぐる硬直した議論を超えると同時に、翻訳の技術的細部における具体的な包摂と排除を明らかにすることで、どの細部を動かせば変化が起こせるのか、実際的な批判と提案を行うことが可能になった。また、生物多様性知識の形成プロセスを考察し、「国家」プロジェクトを人類学的な「フィールド」としたことで、生物多様性をめぐる分類学や生態学などの自然科学、政治学、社会学・人類学の学際的対話を可能にした。

研究成果の概要（英文）：This research aimed at critically examining what happens in the contact zone of scientific and indigenous knowledge, focusing on a project on "biocultural diversity" in India. By considering "scientific knowledge/indigenous knowledge" not as a "system" but as an unstable situated "practice" that is generated in a specific place, I tried to clarify "what is produced" in the process of negotiation of multiple knowledge. In the course of my research, it became clear that India's efforts on "biocultural diversity" are closely related to the recent lawsuit to grant juridical status to the Ganges River, so I conducted ethnographic research on this project as well. The achievement of this research has published as my monograph, "The Anthropology of Intellectual Property Rights" and several journal articles and book chapters in English.

研究分野：文化人類学

キーワード：生物文化多様性　科学人類学　在来知　データベース　インド　法人類学　翻訳

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年のグローバルな環境政策の中心である「生物多様性」は、常に「文化多様性」とセットで議論され、科学知と在来知のかかわりという点でも興味深い現象を生んでいる。すなわちそこでは、生物資源の多様性の保全が科学だけでなく、それを現場で維持してきた「コミュニティ」の人々の多様な在来知を必要とすることが前提となっている。1992 年の生物多様性条約は、こうした在来知を「知的所有権」の枠組みで保護し、その科学的・商業的利用（とりわけそれを利用した製薬開発）に対する利益配分を義務化することで、人々の生物資源保護に対するインセンティブを作ろうとした。

この主題をめぐる人類学的研究は、在来知とは特定のコミュニティの「所有物」として実践から切り離して取り出せるような相互に境界化された知識「体系」ではないと批判してきた。申請者自身のこれまでの研究も、知的所有権という本来適合的でない枠組みが在来知に適用されたとき、いかなる事態が起こるのかを特定プロジェクトの調査を通して明らかにしようとするものであった。

ただし近年の「生物文化多様性」をめぐる取り組みの多くは、こうした批判を取り込み、既にある「体系」としての在来知を「知的所有権」の枠組みを通して保護することではなく、多様な科学知と在来知の協調の中でいかに生物資源保全についての新たな知識と主体を作り出すかに力点を移している。科学先進国であると同時に、生物資源の豊富な「資源国」でもあるインドはこの動きを先導している。申請者の研究は、こうした生物多様性をめぐる新たな動きと、科学知／在来知の接触をめぐる新たな人類学の視座（Latour, 1987; Satsuka 2015; Zhan 2009）――「科学知／在来知」を首尾一貫した知識「体系」ではなく、特定の場で生成する不安定な「実践」と捉える――を踏まえ、インドの「人々の生物多様性登録（People's Biodiversity Register）」プロジェクトにおいて、異なる実践間の翻訳を通していかなる知識が生成するかを明らかにすることを目指した。

２．研究の目的

科学と在来の知識はどう異なり、また両者はどのような関係にあるのが望ましいのか。この問いは、開発や環境問題など現代社会における実際的な課題であると同時に、人類学を貫く根源的な理論的テーマでもある。本研究は、インドにおける「生物＝文化多様性」に関するプロジェクトを対象とする。「生物多様性」の保全をめぐっては、分類学、生態学など複数の科学と、生物資源を維持してきた「コミュニティ」の人々の多様な在来知が重視される。先行研究では、「科学知／在来知」を首尾一貫した知識「体系」と捉え、両者を首尾一貫した実体とみなすことで、その融合可能性／不可能性をめぐる硬直した議論を導いていた。それに対して本研究は科学人類学の視点を取り入れることで、それらを特定の場で生成する不安定な「実践」と捉え、生物多様性をめぐる複数の知識の折衝の場で「何が生み出されるのか」を明らかにしようとした。それを通して上記の課題に対し理論的な貢献を果たすと同時に、学際研究への新たな展望を拓くことを目指した。

３．研究の方法

「人々の生物多様性登録」プロジェクトとは、特定地域の生物資源とそれに関する在来知を生態学、分類学の用語に翻訳してデータベース化し(1)、またその成果をローカルなコミュニティに還元しようとする(2)インド政府の取り組みである。それは、2002 年に国家生物多様性法が制定されて以降、各州政府レベルで実施されるようになった。本研究は、州内の標高が 240m から 7,816m まで開きがあり、多様な植生に恵まれる北部ウッタラーカンド州の取り組みに注目して、以下の点を明らかにしようとした。

(1) <u>生物文化多様性に関する知識のデータベース化過程</u>：州の研究機関に所属する植物分類学者、生態学者、ローカル NGO、そして薬草治療の専門家「ヴァイディヤ」や多様な現地の人々が、いかに「貴重な」生物資源と在来知を文書化するのか。ドキュメンテーション過程における具体的な交渉・翻訳と、その過程における包摂と排除を明らかにする。

(2) <u>「コミュニティ」における知識の再教授と植物種の栽培</u>：完成したデータベースをもとに、「コミュニティ」を「責任ある環境保護主体」とするために、「貴重な」在来知の再教授と特定植物種の栽培が行われている。これらが人々の環境知識や集合性をめぐる認識にいかに働きかけるのか、とりわけ「ヴァイディヤ」の治療実践とそれを取り巻く供犠、贈与、慈悲の変化に注

目して検討する。

以上の科学知と在来知の接触の場としてのプロジェクトを対象としたフィールドワークを通して、現代インドにおいて「生物文化多様性」をめぐっていかなる知識や関係が生み出されつつあるかを批判的に明らかにし、下記の文脈において理論的貢献を果たすことを目指した。

尚、2020 年冬以降は新型コロナウィルスをめぐる状況により現地調査が叶わなかったため「人々の生物多様性登録」プロジェクトの関係者にオンラインでインタビューを行うと同時に、メディア記事や裁判資料の分析、生物多様性をめぐる人類学、科学技術社会論、生態学、法哲学などの文献の精読を行った。また下記に詳しく述べるように、初年度の文献・現地調査によって、フィールドであるウッタラーカンドにおける「生物文化多様性」をめぐる取り組みは、ガンジス川の保全をめぐる各種のプロジェクト、とりわけ近年のガンジス川に法人格を認める訴訟やガンジス川の保全のための国家の大規模灌漑プロジェクトと密接に関連していることが明らかになった。よって 2019 年度以降は、法人格訴訟にかかわる法曹、政治家、NGO 関係者、農民、また国家プロジェクトを推進する人々、反対する社会運動家などにインタビューを行った。

４．研究成果

(1)「生物文化多様性」プロジェクトをめぐる調査とその成果出版

上記の 3(1)(2)の調査は、2017 年、2018 年にそれぞれ 1 か月程度インド・ウッタラーカンド州で行った。ウッタラーカンド州内の森林研究機関、薬草研究機関の植物分類学者、生態学者、そして薬草治療の専門家「ヴァイディヤ」や多様な人々の折衝のもとで、いかに「貴重な」生物資源と在来知が登録されるのか、その過程において何が含まれ、何が排除されるのかを明らかにした。その成果の一部は 2 月に世界思想社から刊行した単著『知的所有権の人類学：現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知』、二冊の著書の分担執筆（The World Multiple (Routledge, 2018), Local Health Traditions (Orient BlackSwan, 2019)）に記した。『知的所有権の人類学』は第 47 回澁澤賞を受賞すると同時に、とりわけ法学、法哲学分野の研究者に読まれ、さらなる研究成果（『工業所有権法学会年報』における論文掲載など）につながった。

(2)ガンジス川の法人格訴訟をめぐる調査とその成果出版

上記の通り、当該研究プロジェクトの調査の過程で現代インドの生物文化多様性をめぐる取り組みは、ガンジス川やその他の自然の存在物に法人格を認める訴訟やガンジス川の保全のための国家の大規模灌漑プロジェクトと密接に関連していることが明らかになった。そのためこれらのプロジェクトについて、2018 年以降集中的に民族誌的調査を行い、また上記の科学知と在来知の「翻訳」をめぐる枠組みも多種民族誌の成果を踏まえたものに変更した。その成果を英語論文として出版すると同時に（NatureCulture, 2020 年）、複数の国際学会や国内の学会で発表した。法人類学と多種民族誌、そして文化人類学と環境法、環境哲学などの他分野を架橋するこの研究については、現在「法をめぐる多種民族誌―現代インドの自然物への法人格付与を事例として」（若手研究 20K13282、研究代表者：中空萌）として継続している。

(3)「自然」「法」「不確実性」をめぐる理論的研究とその成果出版

本プロジェクトの後半の時期は、新型コロナウィルスをめぐる感染状況により、現地調査が叶わなかったため、本研究課題に関連する「自然」「法」「不確実性」などをめぐる理論的研究に力を入れた。その成果を分担執筆（『文化人類学の思考法』(世界思想社, 2019)）、学術論文（『文化人類学』, 2021）、共訳書（『不確実性の人類学』(以文社, 2020)）として出版した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 中空 萌	４．巻 81
２．論文標題 高野さやか著 『ポスト・スハルト期インドネシアの法と社会 ――裁くことと裁かないことの民族誌』	５．発行年 2017年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 729～733
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.14890/jjcanth.81.4_729	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 Nakazora, Moe	４．巻 6
２．論文標題 Making Law of/with Nonhumans: The Ganges River is a Legal Person	５．発行年 2020年
３．雑誌名 NatureCulture	６．最初と最後の頁 オンライン
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高野さやか・中空萌	４．巻 86
２．論文標題 法の生成の人類学に向けて	５．発行年 2021年
３．雑誌名 文化人類学	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 中空萌	４．巻 44
２．論文標題 伝統的知識と知的財産権：文化人類学の視点から ３．	５．発行年 2021年
３．雑誌名 工業所有権法学会年報	６．最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計14件（うち招待講演　11件／うち国際学会　4件）

1．発表者名 中空萌
2．発表標題 知的所有権の人類学：法学と文化人類学の対話に向けて
3．学会等名 東京大学知的財産権法研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

1．発表者名 中空萌
2．発表標題 知的所有権の人類学：現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知
3．学会等名 2019年度第2回HINDAS研究会
4．発表年 2019年

1．発表者名 NAKAZORA, Moe
2．発表標題 Public engagement of Japanese anthropology?: From a young scholar's perspective
3．学会等名 The Taiwan Society for Anthropology and Ethnology Annual Meeting（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 中空萌
2．発表標題 『知的所有権の人類学：現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知』をめぐって
3．学会等名 森林所有権制度研究会（招待講演）
4．発表年 2019年

１．発表者名 NAKAZORA, Moe
２．発表標題 Making and un-making of new biosocial subject?: “Folk” Ayurvedic knowledge and intellectual property rights in contemporary India
３．学会等名 The 11th INDAS-South Asia International Conference（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中空萌
２．発表標題 現代インドの生物資源をめぐる科学と政策のインターフェース：生物多様性条約後の実践を事例として
３．学会等名 歴史学工房（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 中空萌
２．発表標題 現代インドに生きるアーユルヴェーダ：伝統医療と文化
３．学会等名 平成30年度第4回 漢方医学と生薬講座（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中空萌
２．発表標題 自然／知識をめぐる人類学と「自然化」？：インド・ウッタラーカンドにおける「自然」と法人格
３．学会等名 国立民族博物館共同研究会「文化人類学を自然化する」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Nakazora, Moe
２．発表標題 ‘Postcolonial’ nature-cultures in translation: Databasing biodiversity and bio-cultural diversity in India.
３．学会等名 Visible and Invisible: Infrastructure & Politics of Cohabitation（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中空　萌
２．発表標題 知識が誰かのものになるとき―現代インドの生物資源をめぐる科学、在来知、知的所有権
３．学会等名 京都人類学研究会（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 中空　萌
２．発表標題 法の生成の人類学―インド・ウッタラーカンドにおける「自然」と法人格
３．学会等名 超域文化人類学ワークショップ
４．発表年 2017年

１．発表者名 Nakazora, Moe
２．発表標題 Experimenting with Folk Medicines: Medicinal Plants as Intellectual Property in India
３．学会等名 Vital Experiments: Living and Dying with Pharmaceuticals after the Human（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 中空　萌
２．発表標題 伝統的知識と知的財産権：文化人類学の視点から
３．学会等名 日本工業所有権法学会（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 中空　萌
２．発表標題 ガンジス川が法人になるとき：「感受性」とインスクリプション
３．学会等名 現代人類学研究会
４．発表年 2021年

〔図書〕　計5件

１．著者名 松村圭一郎・中川理・石井美保・中空萌・山崎吾郎・久保明教・渡辺文・深田淳太郎・佐川徹・高田明・髙橋絵里香・松嶋健・猪瀬浩平	４．発行年 2019年
２．出版社 世界思想社教学社	５．総ページ数 226（担当部分：16-28）
３．書名 文化人類学の思考法（第1章「自然と知識」担当）	

１．著者名 Arima Mishra, Moe Nakazora, Devaki Nambiar, Harilal Madhavan, Sarika Kadam, Shrish N. R,Steffy Dhayalan and Pooja Venkatesh	４．発行年 2019年
２．出版社 Orient BlackSwan	５．総ページ数 328（担当部分：189-207）
３．書名 Local Health Traditions: Plurality and Marginality in South Asia ('Making "Pluralistic" Health Systems:Documentation of "Folk" Ayurvedic Knowledge'担当)	

１．著者名 中空萌	４．発行年 2019年
２．出版社 世界思想社教学社	５．総ページ数 293
３．書名 知的所有権の人類学：現代インドの生物資源をめぐる科学と在来知	

１．著者名 Nakazora, Moe	４．発行年 2018年
２．出版社 Routledge	５．総ページ数 260(担当部分：Chapter 9: 140-154)
３．書名 The World Multiple: the Quotidian Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds	

１．著者名 中川理・中空萌	４．発行年 2020年
２．出版社 以文社	５．総ページ数 281
３．書名 不確実性の人類学：デリバティブ金融時代の言語の失敗	

〔産業財産権〕

〔その他〕

広島大学研究者総覧
http://seeds.office.hiroshima-u.ac.jp/profile/ja.5dbb77882d9c4dfa520e17560c007669.html
広島大学　研究者総覧
http://seeds.office.hiroshima-u.ac.jp/profile/ja.5dbb77882d9c4dfa520e17560c007669.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関